令 和 5（2023）年 度

学校推薦型選抜（福祉情報学部） 試験問題

小論文

注 意 事 項

1　試験開始の合図があるまで、この問題冊子を開かないで下さい。

2　解答はすべて解答用紙に記入して下さい。

3　解答には鉛筆かシャープペンシルを使用して下さい。

4　問題は全部で４ページあります。

5　試験時間は９０分です。

6　試験終了後、問題冊子も回収します。

7　何か伝えたいことがあるときは挙手して下さい。

【１】次の文章を読んで、下記の問に答えなさい。

哲学対話に対してよく言われるのは、結論も出さず、目的もなく話し合いをすることに、いったいどのような意味があるのか、という疑問である。学校の授業で行うにしても、何を学んでいるか分からないから、授業として成立しないのではないかといった心配をされる。会社でも、そんな悠長なことをやっている余裕はないと言われる。

こうした意見はよく分かる。たしかに通常、話し合いをする時には明確な目的があり、それに沿って何らかの結論を出す。出ないこともあるが、出すことを目指すのが当然だ。そのような“常識”からすると、哲学対話は通常の話し合いとはかなり違っている。

だから哲学対話の“用途”――どういう時に、何のために哲学対話をやるのが有意義なのか――をきちんと理解しておいたほうがいい。さもないと、せっかくよかれと思ってやっても、「やったって仕方ない」とか「何の意味があるのか」という反応が出てしまう。

――― （中略） ―――

そこでまず用途、哲学対話がどういう場合に向いているのかをあげておこう。

・とくに結論を出さずに、いろんな意見や情報を共有したい時
・とりあえず問題やテーマに関心をもってほしい時
・相互理解を深め、人間関係の土台を作りたい時
・いろんな人（年齢、性別、職業、立場等が違う人たち）と話す時

“用途”としては、さしあたり以上のように言える。逆に、とにかく結論を出さなければいけない時、誰が／何が正しいかをはっきりさせないといけないような時、哲学対話はあまり有効ではないだろう。

――― （中略） ―――

世の中ではほとんどのところで、些細なことでもきちんと話ができず、その土台となるような人間関係もないのに、いきなり重要な案件を話し合い、結論を出そうとする。そして多数決をしたり、発言力のある人に引きずられたり、あるいはそういう人に無責任に委ねて物事を決めてしまう。そうすると、とりあえず結論は出るのだが、実際には納得していない人も多く、その人たちは、その後も積極的に協力はせず、しぶしぶ追従するか、無関心なまま関わろうとしない。

また一般の話し合いにおいては、「あいつが言うなら反対しよう」とか「あの人に味方しなきゃ」というふうに、中身の是非よりも、人間関係が結論に影響を及ぼすことも少なくない。そのような場合、何かを決めたとしても、軋轢（あつれき）や確執、なれ合いが生じて結局うまくいかない。それでまたやり直す羽目になれば、かえって遠回りになってしまう。

一方、対話によってあらかじめ人間関係ができていれば、みんながより納得する議論をしたうえで結論を出しやすくなる。そうすれば、距離をとったりしぶしぶ譲歩したりするのではなく、誰もが何らかの意味で自分事として受け止め、前向きに行動を共にしてくれる。長期的に見ると、よりよい結果に至るには、こちらのほうがずっと近道なのではないかと思う。

それを顕著に示す事例をいくつかあげておこう。

〈学校〉

学校で哲学対話を実践している知人の先生から聞いた話だが、いじめについて対話をしていた時、生徒の側から「人がいじめられているのを見るとなぜ笑うのか」という問いが出てきた。それについて話をしているうちに、結局みんな周りに合わせて笑っていただけで、誰も面白いとは思っていなかったということが分かった。その後、いじめを見てもみんな笑わなくなり、なかにはいじめている人に対して「そういうことするのやめなよ」と言う人が出てきた。それでいじめは次第になくなっていったという。

いじめをなくすために、学校ではいろんな話をする。いじめはいけない、いじめられる人の気持ちを考えよう、先生に相談しよう、目撃したら報告しよう……そうやっていろんな決め事をする。しかし先生がいくら教えても、当事者たちにあの手この手で対処しても、いじめはなくならない。だから教師も生徒もあきらめる。いじめをなくすなんて無理だ、と。

けれども、生徒たちが目的を決めずに、結論を出すわけでもなく、自発的に出した問いについて話して、お互いの思いや疑問を共有する。その結果、いじめをなくすという、通常きわめて困難な目標が、特別な努力なしでおのずと達成されたのである。

〈会社〉

ある大手企業の部長が部下と定期的に哲学対話をするようになった。彼らが最初に出した問いを毎回一つずつ取り上げ、話をしていく。なかでも「好きなご飯のお供は何か？」について話した時は、ことのほか盛り上がったという。

対話じたいはとくに哲学的な深みや広がりはなかったかもしれない。だが、このような些細な、誰でも参加できる話題で、1時間じっくり話ができるというのは、つねに是非が問われ、優劣や上下の関係でなされる仕事の話と違って、楽しく開放的であろう。

部下たちは、対話の時間を毎回楽しみにするようになり、部長が忙しくて「今日はやめよう」と言ったら却下され、対話せざるをえなくなったという。それほどまでに、上司や同僚と仕事以外で話がしたかったらしい。普通に考えれば、奇妙なことだろう。

こうなると普段の会話にまで影響が及ぶにちがいない。仕事の合間でも、最近おいしい漬物を見つけたという話題で、同僚どうしや上司と部下が話すこともあるかもしれない。部下にとっては、偉くて近寄りがたいと思っていた上司と意外な共通点が見つかり、親しみを感じる。上司のほうは、頼りないと思っていた部下が意外に深く物事を考えていることに気づく。そうなれば、仕事の面だけで上司を恐れたり恨んだり、部下を叱ったり軽く見たりすることもなくなる。

こうして一見“無駄話”のように見える対話によって、職場の人間関係は確実に変わっていく。そうすれば、仕事のために必要な話し合いも、ずっと実のあるものになるにちがいない。それで業績が上がったとしても、何ら不思議はない。

〈地域コミュニティ〉

過疎地の町おこしの話し合いでも、同じようなことが起きる。通常の話し合いは、“長老”と呼ばれるような人が大きな権限をもっていて、若い人が何か言っても受け入れてもらえない。また女性はそもそも話し合いの場にいない。いろんな人が対等に話せるような場はもともとなく、作ろうと思ってもなかなか作れないのが現状である。

そのようなところで哲学対話を行うと、通常はいっしょに話をしない年齢も性別も違う人たちがお互いに意見を言い、耳を傾ける。そうしていろんな人たちが答えを求めずに、いろんな角度から考えて話していく。すると、もともと課題だと思って議論していたことが実はそうではなく、問題は別のところにあることが分かったということもよくある。

いつも通りの話し合いで結論を出しても、問題が解決することはなく、かえって紛糾したかもしれない。それが対話をすることで、当初の問題は解決する代わりに解消し、より適切な課題が見つかるのである。

もちろんどこでやるにせよ、いつでもこのようにうまくいくわけではない。だがこうした例は、結論を出すこと以前に、何が大切なのかを教えてくれる――問題に関するそれぞれの立場、考えを互いに理解し尊重し、みんなで共有すること、その前にまずはいっしょに課題に取り組む人間関係を作ること――哲学対話にはその力がある。

結論を出す話し合いも、人間関係がしっかりできてはじめて、その本来の目的を達するにちがいない。それどころか、対話をすることは、短絡的に中途半端な結論を出す話し合いより、問題解決のためにより確実で早い方法かもしれないのだ。

出典：梶谷真司『考えるとはどういうことか　0 歳から 100 歳までの哲学入門』幻冬舎（2018 年）

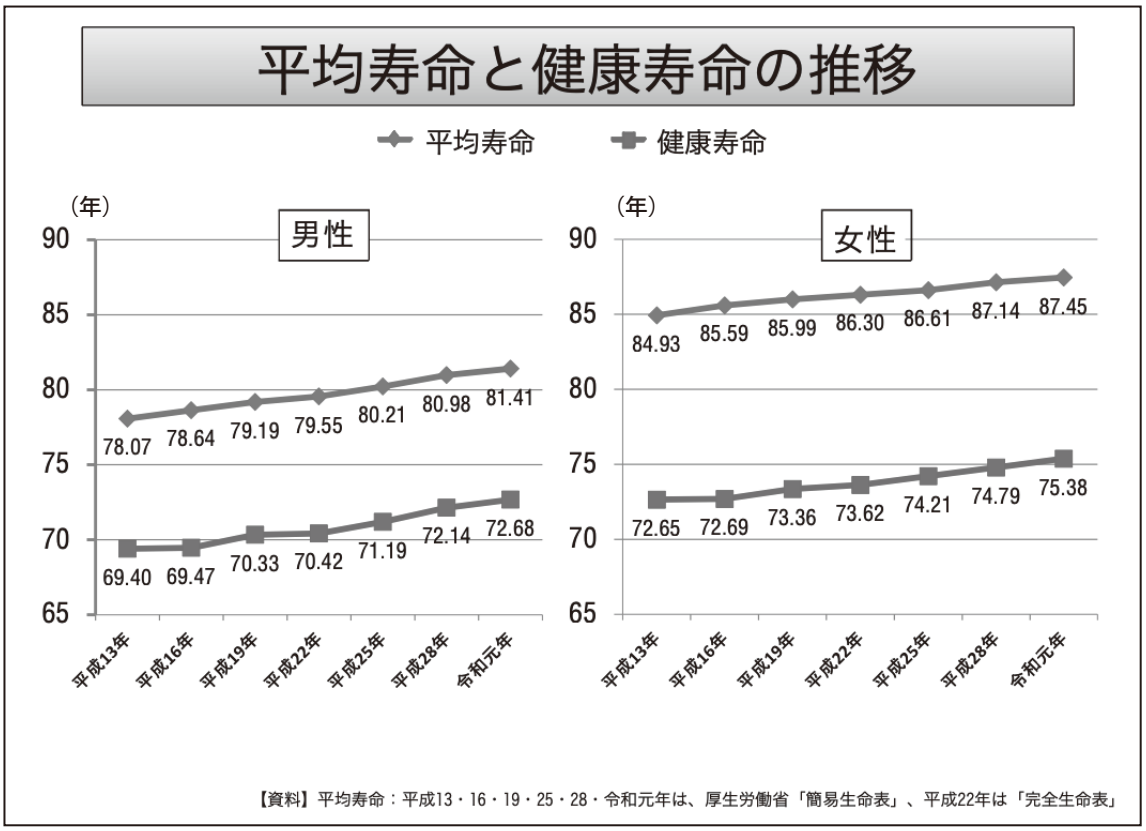
問１　「対話」と「話し合い」がもたらす結果の違いについて、筆者の考えを 300 字以内でまとめなさい。

問２　文中の具体例を踏まえて、「哲学対話」に対するあなたの考えを 500 字以内で述べなさい。

【２】　厚生労働省は、令和３年 12 月に開催された第 16 回健康日本 21（第二次）推進専門委員会において、日本人の平均寿命及び健康寿命について下図の通り発表している。この図から読み取れることを簡潔にまとめるとともに、この状況に対して社会の担い手となった際、あなたがどのように対処すべきであると考えるか、大学生活での学びと関連を持たせて論じなさい。

（800 字以内でまとめなさい。）

注：健康寿命　健康上の問題で日常生活が制限されることなく生活できる期間のこと。



出典：厚生労働省 第 16 回健康日本 21 推進専門委員会　資料 3-1「健康寿命の令和元年値について」（2021 年）

https://www.mhlw.go.jp/content/10904750/000872952.pdf